
僕が綴った詩

二色誠人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が綴った詩

【Nコード】

N9762V

【作者名】

二色誠人

【あらすじ】

私の一つ目の詩集です。

「此処は僕の気持ちの吐き出し場。僕のいろんな気持ちを綴った詩」

誕生日を迎えた夜

日付が変わった

今日は特別な日

僕が一つ歳をとる日

今年もまた一つ歳をとった

けどまだ大人にはなれない

あと数年したら大人になれる

嫌でも大人になる

昔は早く大人になりたいって思ったけれど、今はなんだか寂しい

今年も一つ歳をとった

大人に近づいていく

このまま大人になっていく

それで良いの？

このままで良いの？

きっとこのままでは良くないだろう

今できる事を 今しかできない事を たくさんやっておこう

子供のうちしか出来ない事をやっておこう

遊びも 勉強も たくさん たくさん

今しかできない事をして 今しか感じられない事を感じる

そうして 立派な大人になろう

来年の誕生日を迎えても 僕はまた同じことを思うのだろうか

誕生日を迎えた夜（後書き）

いつからか、「プレゼントを貰える日」という意識から「大人になる日」という意識に変わっていた。

詩人になりたい者の詩

嬉しい時

詩を書き綴ろう

言葉がどんどん綴られて

幸せの詩が出来上がる

悲しい時

詩を書き綴ろう

気持ちは少し落ち着いて

悲しみの詩が出来上がる

怒った時

詩を書き綴ろう

とにかく ありのままの気持ちを

怒りの詩が出来上がる

詩はその時の考え 気持ちを表すのだろう
ありのままを

充実している時は 充実した詩が

虚無を抱えた時は 虚無の詩が

今の自分を残す 一つの手段

そして もし

それを誰かが読んでくれたのなら

それほど嬉しい事はない

詩人はそう思うのだろうか

詩人になりたい者の詩（後書き）

ありのままを綴っている。

輝く世界

嗤いたきや嗤え
僕はゆるがない

目標ができたんだ
今までなんとなく生きてきたこの僕に
やっと目標ができたんだ

それに向かって生きようと 頑張ろうとやっ と決意で来たんだ

嗤いたきや嗤え
僕は惑わされない

目標も無く ただ生きる毎日はずまらなかった
毎日が同じで 繰り返しに見えて
今は違う

色がついて 音が透明で 違う世界に来たみたいだ
嗤いたきや嗤え
僕は前を見る

日々進歩で 進んでいくのがよくわかる
僕が変わったみたいだ 違う人間になったみたいだ

嗤いたきや嗤え
僕はこの世界で生きる

輝く世界（後書き）

僕は変わったんだ。

過去自己嫌悪

過去の自分が嫌いだ
許せない

どうしてあんなことをしたのか
何故あんなことを言ったのか

悔やんでも

過去は過去

自分は自分だし
変えられない

自分を肯定出来たら

認められたら

好きになればたら

楽になるのだろうか

今はまだ

自分を肯定できないし

認められないし

嫌いだし

どうしようもなく

もがくばかりだけど

いつか

僕が僕自身を

受け入れられたいのに

今日もまた

僕は

僕として生きるんだから

「自分」を殺して生きるよりは

「自分」として生きたい

過去自己嫌悪（後書き）

過去は変えられないのは知っている。じゃあ、未来は僕の手で変えられるのか？

私的恋事情

初めて好きな人ができました

初めて異性を意識しました

初めて女と自覚しました

初めての感情でした

貴方と話せるだけで嬉しいです

貴方と笑いあえて幸せです

貴方に会いたいです

今日のメールの最後

「また明日」

明日は会えるでしょうか

明日が待ち遠しいです

恋なんて 愛なんて 一生わかんないと思っていました

お付き合いも 一生縁がないと思っていました

そんな私が こんな私が

初めて異性を 異性として好きになりました

少し遅い 子供になったような 淡い初恋

私的恋事情（後書き）

また、明日。

弱者

嗚呼 また男子が嗤った
僕を嗤った

一人じゃ何もできない僕を
ただ嗤うんだ

嗚呼 女子が嗤った
僕を嗤った

またありもしない噂を流して
陰で嗤うんだ

これだから

いじめられっ子は嫌なんだ

散々な仕打ちをされても
言い返すことすらできない
そんな弱さを持った子が狙われて

皆の絶好の標的
他人を貶めて嗤って

そうでもない
自分も狙われるから
嫌でも従うしかなかったり

いじめの現状って辛いね

嗚呼 世界のどこかで
僕と同じ思いをしている子は……

弱者（後書き）

自分と似ている子を探してしまうのも、当たり前前になっていた。

過去人

僕はなんとなく生きてきた
だから意思を持たなかった

よく考えもせず流れに任せて生きてきたんだ

今は後悔している

だって

今更意思が生まれたから

「こうしたい」「ああしたい」

でも

人に伝えたら迷惑になるかもしれないって

臆病な僕の考え

人に嫌われる事を極度に恐れる僕の考え

過去を引きずって

嫌われたら嫌だって思うと

何もできなくなる

意思を封じ込めて

表情も無くなつて

笑えなくなつた

過去に縛られて

未来を見られなかった

その当時は死にたかつたんだよ

でも今は

まだ臆病だけど

過去を引きずっているけれど

温かく接してくれる人がいるから

その人たちの前では 笑える

本当の自分をさらけ出したって良い

僕の新しい居場所はこちらだ

過去人（後書き）

笑える幸せ。 笑いあえる幸せ。

普通男子と病気女子

いつも仲良くしてくれる男の子

彼は普通の男の子

勉強頑張って バイトして

いつも忙しい男の子

今日もいつも通り

仲良くしてくれて

安心する

だけど

私は

病気

病気ナノ

『私ハ病気ナノ。心ノ病気ヲ持ッテルノ』

『ソレデモ貴方ハ、仲良クシテクレルノ?』

『私ハ病気。病ンデル。普通ジャナイ。ソウ思ウノデシヨウ?』

『今スグ縁ヲ切りタクナッタデシヨウ?』

『普通ジャナイカラ』

『…………』

本当の事を 本当の姿を

「普通」の彼に告げたら 私はどうなるの

彼はどう思っの

……。

普通男子と病氣女子（後書き）

私ハ貴方ニ好カレタイタイノ。友達デイタイノ。ダカラ、本當ノ姿ヲ言エズニイルノ。

夜旅

夜の散歩

今の僕は旅人だ

何かを探して旅してる

今日も日課の夜旅

この時間だけは全てを忘れて

音楽聴きながら

何かを探してる

僕はもうすぐ大人になる

それはそれはあつという間にね

それまでに

何かを探してる

探してるんだ

朝が来れば

また現実に戻されて

夢も見れずにいる

せめて それまでの夜の間は

あと数時間したら 朝が来る

太陽を連れて 月よさようなら

現実を連れて 夢よさようなら

今日の旅は此処までだ

続きはまた今度

僕は“ 帰るべきところ ” へ

夜旅（後書き）

ただいま。

あの時すら、もう思い出の一部なんだ

手を軽く振って別れた

駅のホームに君の姿はもう無い

僕は電車に乗り込んだ

がたごと　ガタゴト

電車に揺られて考える

僕はぼんやり考える

今日一日のこと

なんとなくの反省会

ああ　そういえば君は今日笑ったかな

ろくに君を見ていないことに気付く

君の顔　そういえばどんな表情で話してたっけ

話したことは覚えてるのにな

表情はぼんやりとしか思い出せないや

僕はどんな表情をしてたかな

君は僕を覚えているのかな

同じこと　考えてるのかな

ああ　もう電車を降りなきゃ

あの時すら、もう思い出の一部なんだ（後書き）

君は僕の表情、覚えているのかな。

僕の知らない君

君の過去を僕は知らない

知りたくもない

だって

僕の知らない君がいるから

僕の知っている君でいてほしい

だって

僕の知らない君が笑ってたら

少し悲しくなるだろう

僕の知らなかった君が幸せそうに笑ってた

過去のことを嬉しそうに話していた

僕の知らない君の友人と楽しそうにしていた

ちよつと悔しかった

もちろん僕だけの君じゃない

仕方がない

仕方がないことなんだ

自分に言い聞かせる

それでも寂しさは消えないな

僕の過去はろくでもなかったから

それに対する嫉妬みたいなものもあるかもしれないけど

醜いこと考えてるなあ

こんな僕は嫌だ

いなくなれ

消えてくれ

君にはとても言えない
こんな感情

僕の知らない君（後書き）

当然なことかもしれない。

でも、醜い僕は嫌いだ。

信じる事

僕はある友達を信じた
信じたけど

酷い仕打ちをされた
だから

もう人なんて嫌い

「信じたのに」

そう言ったら彼女は

「信じてって頼んだわけじゃない」

月日は経って また新しい友達ができた
どうせまた上辺だけなんだろう

たいして信じはしなかった
たいして期待もしなかった

でも彼は優しかった
彼女は笑ってくれた

どうして

僕に優しくしたって笑ったって
君の利益にはならない
それなのに何故

またここで信じたら
後で辛い思いをする事になるから

僕は信じてない

そう思ってたのに

「君を信じる」

そう言ってくれた君たちの目は優しかった

信じる事（後書き）

僕は……信じたい。そう思った。

夢

引き出しを開けたら 出てきた一枚の写真
無邪気な顔をした子供の写真だった

これが俺だったなんて
誰が思うだろう

きっと小学生くらいだろう
大人の自分に想いをはせて かつこいい自分を思い描いた
今の俺は
将来のことに頭を悩ませ 勉強ばかりのつまらない毎日を送って
いる

あの頃の俺がこれを知ったらかっかりするだろうな
幼い俺よ
それでも夢は持っておけ
俺が叶えてやるから

毎日つまらなそうに見えるだろう
それでも頑張っているんだぜ
幼いころの夢を叶えるために

お前が望んだかつこいい俺にはなれないかもしれない
ごめんな
だけど

夢だけは叶える
叶えるから
お前も頑張って今を生きろよ

みんなそつやって生きてるんだから

夢（後書き）

大人の俺は、何を考え生きているのだろうか。

どうすれば良い？

悪口の言い合い

噂話

この手の話になると嫌になる
逃げ出したくなる

話に乗るのも嫌だし

逃げ出したらこの人たちの悪口のネタになる
かといって人を悪く言いたくない
曖昧に誤魔化すしかないのだけれど

何故そんなことを話すのだろう

話して気が楽になるのか？
すっきりするのか？

「あの人が嫌い」

「この人のここが嫌」

私は言いたくない
口を噤むくぐむ

人の好き嫌いぐらいあるだろうけど
私は言わない
可哀想とかじゃない
ただ
言いたくないのだ

どうすれば良い？（後書き）

言わない。 言えないよ。

臆病な僕の些細な成長

すぐに逃げ出すことばかり考えていた
少し前の僕

嫌なことがあるとわかると
どう逃げるか考え 可能な限り逃げた

結局さ

臆病なんだよ

失敗を恐れて

傷つきたくないんだ

「変わったね」

ある日の放課後

先生に言われた一言

言われてみれば 逃げなくなった

それだけは成長した

確かに逃げることを考えたり マイナスに考えたりもするけど
実際には逃げなくなった

「大人っぽくなったよ」

僕はなんて返せばよいのか分からなかったけど

ちょっぴり嬉しかった

臆病な僕の些細な成長（後書き）

少しずつ、大人になるんだね。

拗れた関係

「私には居場所がない」

そう言われた

ショックだった

私のせいで

私のせいで

ゴメン

ゴメンね

ごめんなさい

決して彼女を仲間はずれにしてたとか
嫌に思ってた事は一切無い

大切な一人の友達

そう思っていたのに

彼女はそう感じていた

居場所がないと感じていた

私がどう思ってたであれ

彼女はそう感じていた

彼女がそう思ってたのは変えようのない事実で

私がそう感じさせてしまったというのも事実

涙がこぼれた

人に嫌な思いをさせた自分に

腹が立った

ごめんね

そして

それでも私の友達でいてくれますか？

我儘だけど

私はまだ 貴方を友達だと思ってるから

……こんな私を 許してくれますか？

拘れた関係（後書き）

謝るしかできない。

事実は変えられない。

二重奏

私達三人 同じ所を目指してた
みんなで頑張っていこうって
最初は明るかった
希望で満ち溢れていた

そんな私達を見て また一人仲間が増えた
これで四人
嬉しかった
嬉しかったんだ

でも最初は気付けなかった
そんなにうまくいくはずがないってこと
一人 辞めていった

三人になった
支えあつて頑張ってきた
いろんな壁にぶつかった
また一人辞めていった

残ったのは 私と途中で入ってきた子だけ
二人 二人だ
最後には 二人しか残らなかった

それでも頑張っていかなければならない
私がいっかりしなくてはいけない
残り一人の子に安心してもらうためにも

「二人になっちゃったね」

そうだね

私達は二重奏だ^{デュオ}

二人で音を紡いでいく

音で人に伝えていく

二重奏（後書き）

人数が減ったって、音楽を愛する気持ちは冷める事は無い。
音楽を通して人に訴えていくことも変わらない。

悲壮感

悲しみを胸に沈めた
沈めきれなくて 泣いてしまったけれど

『この悲しみを決して人には見せてはいけないよ』

自分に言い聞かせた
だって この悲しみを知ったら
また悲しむ人がいるから
悲しむのは私だけでいい

涙を拭って 待っている人の元へ

「おかえり」

嗚呼 君は何も知らないからそうやって笑っていられる

この胸は悲しみに満ち溢れた
でも

笑っていないきや
知られないために
私は笑った

君の前では笑うよ

一人になったら
思いつきり泣こう
いつになったら 涙は止まるかな
悲しみは消えるかな

本当に笑えるのは
いつになるかな

悲壮感（後書き）

君には、言えないよ。
笑ってほしいから。

理想の人

心に奥底に沈む 負の感情

普段は隠していた 明るくふるまっていた
でも君は いとも簡単に見抜いて
僕にこう言った

「君が死んでしまうよ」

君には話してもいい
この感情の一部くらい
受け止めてくれるかい
話しているうちに涙がこぼれてきた

「君の判断は正しかったと思うよ」

そうかい 僕を認めてくれるかい
ありがとう
負の感情は ゆっくりと消えていくかい
そうであれば 楽になるのかい

「君は君のままでもいい」

君も辛いをしてきたろうに
それでも僕の事を考えてくれた
真剣に 僕のために

僕も 君みたいな人になりたい
人を安心させるような人に なりたい

理想の人（後書き）

僕も人に求められるような人になりたい。

孤独と自由

私のせいで人が私のもとから去った
だから

残った君を繋ぎとめたくて必死になった
嫌われたくない 一緒にいてほしい 独りになりたくない一心で

孤独を知ってしまった
だから

人と一緒にいられる幸せを失いたくないと必死になった
君に依存してしまっていた

もし君が去ってしまったら
考えると怖くて
君がいなくなったら
私はどうなるのだろう

でも君を束縛するのは嫌だ
だって

君が苦しくなるだけだから
私のために苦しんでほしくない

私が嫌なら去っても良いよ
君がそうしたいなら

私は結局孤独なんだと思い知るだけ
君は自由になる

孤独と自由（後書き）

君の為？ いや、これはきっと、私の為。

自分という存在

君の過去に何があったかは知らないが
なにかあったのだろう

そのせいかな

君はいつも怯えた目をしているよ

なにかに怯えて 避けようとし 独りになりたがっている
少なくとも僕にはそう見える

だが同時に

そんな自分を嫌い 変わろうとしているような時もある

僕もな 昔はそうだった

変わりがかった 自分を変えたかった
今 変わったかはわからないけれど

自分を変えることって難しいんだぜ
だって

僕の場合

きっかけがなかったら変わらなかった
変わろうと思わなかったんだからさ

焦らなくていいよ

君は君なんだ

君らしくていいんだ

君でいいんだ

だから

僕も僕なんだ

僕らしくていいんだ

僕でいいんだ

変わりたいければ変わればいい

それも君だ

それも僕だ

自分という存在（後書き）

自分でいていいんだよね。

負のものたち

暴走する僕のものと思われる感情

いや 暴走しているのは 僕

もう一人の 僕の知らない僕かもしれない

止まらない負の感情の連鎖

考えれば考えるだけ 負の感情 負の考えが思い浮かび
希望がかき消されていく

頭の中は もういっぱいだ

次々に浮かんでくる負のものに
負けてしまっている

きつとそれらが暴走しているんだ

僕の一部が 暴走している

止めたくても 止める術を知らない

早く止めなくちゃ 止めなくちゃ

じゃないと 僕が死ぬ

早く 早く

死んでしまっ！

叫んで もがいて

彼は死んだ

いや

彼の心は死んだ

彼の心から希望が無くなった

それは

負のものたちに心を支配されたから

負のものたち（後書き）

時として心を殺してしまうくらい恐ろしいものになる。

君と出会ったことを僕はきつと忘れはしないだろう

僕と君が出会ったのは

偶然か必然か

それは知らないけれど

出会ったことは事実で

共に笑い 泣き 苦楽を共にしてきた

これからもきつとそうだろう

だが別れが来る

それは変えられず

君は僕にとって特別な存在だった

心を開く事が出来た人

だから 僕は君を忘れはしないだろう

いや 忘れる事は出来ないだろう

まだそんな実感は湧かない

ずっと一緒にいられる気がする

出会ったこと

偶然？ 必然？

どちらにでもとれるだろうね

君はどう思うかい？

僕はお互いに必然だったと信じるよ

君と出会ったことを僕はきっと忘れはしないだろう（後書き）

答えはどちらでも構わない。それが君の答えだから。

家路

この地面を思いっきり蹴ったら

あの空に向かってジャンプしたら

僕は地面を離れ

空を飛ばたいといけるんじゃないかって

そんなこと ぼんやり考えてた

そんなこと あるはずないのにね

僕の目の前にあるのは

いつもの街並み

僕の住む街

空は夕焼け 赤く染まってる

時機に夜が来る

時機に明日が来る

少しだけ眠たい

疲れているんだろう

早く家に帰りたい

帰って 友達とメールでもして

良い気分で眠りたい

今日ぐらい 良いじゃないか

いつもと違ってたって

家はもうすぐそこだ

家路（後書き）

また明日、家路にいたら同じことを考えるんだろうか。

好き／嫌い

あの時 君のことを嫌いと思ったなんて
どうかしていたんだ

残酷な事を言う

真顔の君 笑わない

決して私に言っただけじゃないのに
違う誰かに向けていていたのに
それでも 嫌だった

君のことを嫌いになれるはずが無かった

結局は 好きなんだ

好きなんだよ

そんな一面を見てしまっても

君の全てを嫌いになることはできなかった

逆に 君の全てを愛することもまだできない

微妙な関係だね

君もきつと

私の全てが嫌いなわけじゃないだろう
私の全てが好きなわけじゃないだろう

きつと

このままでいいんだよね

全てを愛すなんて

当分出来ないもの

好き／嫌い（後書き）

まだ、出来ない。私も君も。

心配性

何度も携帯を開く
そこに表示されているのは いつもの画面
電話も メールも 誰からも来ない
寂しいな

こんな日がずっと続くと
嫌われてるんじゃないかとか
必要とされてないんじゃないかとか
いらぬ心配をしてしまう

心配性なのかもね

今日で5日目

誰からも連絡が来ない
忙しいんだ きつとそうだ
そう思いこもうとしても また心配してしまう

何かあったのかな
どうしたんだろう

他人から見たら 笑えるよね
こんなに心配ばかりして

だって

心配なんだもの

心配性（後書き）

心配するなって言われたって心配しちゃうんだよ。

“ 特別 ”

幼いころは

一番になりたくて必死で頑張ってた
そうだろう？

僕だってそうだ

テストでも かけっこでも
一番になりたかった

だって 一番になったら
特別になれる気がしたから

「 凄い 」 って言われたかった

でも残念ながら 僕はなんでも普通だった
テストも かけっこも
一番にはなれなかった

なれるはずがなかったんだ

だって

特別ではないから

別に卑屈にはなっていないさ
ただ 残念には思ってた

大きくなったら

特別なんてどうでもよくなった

世界は広いつて思い知った

それなのに 何故

君は僕を特別扱いするんだい

僕は君にとってどんな“特別”なんだい

でも

ちよっぴり嬉しいんだ

君だけでいい

君だけが“特別” って思ってくれるだけでいい

君だけでいい

“ 特別 ” (後書き)

君だから、
いい。

記録帳

ずっと書いている日記

もう何冊にもなる

私の記録帳

最初の一冊目を手にとって そっと開いてみる

そこには 今よりも汚いけれど 一生懸命書いた字が綴られていた
まだ幼かった 私の記録

「今日は友だちとあそんだ」

「今日は先生におこられた」

「たのしかった」

「もういやだ」

そんなことあったっけ

そんなこと思ってたんだ

なんとなく笑える

そっと閉じて 本棚へ戻す

あれから何年たっただろう

大きくなっ た私

もうすぐ大人になる

まだ書き続けるつもりだ

私の記録

大人になってもう一度読み返せすだろう

また笑えるんだろう

記録帳（後書き）

今から楽しみだよ。

伝える人

知らないミュージシャンが テレビの中で歌っている
特別上手だとは思わなかったけれど 彼は必死に歌っている
人に想いを届けたくて 気持ちを届けたくて
歌っているんだろう

僕だってそうだ

彼は歌 僕は詩

伝える方法は違っけれど 伝えたいのは一緒
人に訴えたい 伝えたいのは一緒

だからかもね

歌っている彼の姿に心奪われたのは

歌が終わった

ミュージシャンは笑った
とても嬉しそうに笑った

僕はただそれを見て

自然と顔が綻んだ

彼はきつと 想いを伝えていける 訴えていける
なんとなくそう思った

伝える人（後書き）

伝えたいという思いがあるのなら。

睡眠

眠ったのか 眠ってないのか
よくわからない
よくわからない睡眠だった

ずっと考え事をしていたような気もするし
眠っていたようにも感じる
不思議な睡眠だった

時計を見ると 3時間ほど経過していた
きつと眠っていたんだろう
浅い睡眠だった

ぼんやりする
まだ少々眠たいや
眠ってしまおうか

目を閉じても
先ほどまで考えていた事が頭から離れず
結局目が冴えてしまう

嗚呼
こんなに
こんなにも

暗い部屋
ベッドの中
僕は力無く横たわる

そしてまた 考える

睡眠（後書き）

ただ、ぼんやりと。

心の傷

誰でもそうだと思う

心に傷があつて 苦しい思いをして生きている

その傷をみるのは 容易くはないし

その傷を人に見せようとしらないもの

だけどね

僕は思うんだ

君の全てを知りたい

だから 君の全て

つまり

君の傷も見せてほしい

見たところで 僕が君にしてあげられることは少ないだろう
でも

君の傷を少しでも癒すことができるのなら

共有することができのなら

それで良い

良いから

僕の傷

見られる自信があるかい

結構痛かったんだけど

君になら見せられる

だから

信じて良い

お互いに見せ合って

共有できれば

それで良い

心の傷（後書き）

怖い？ 怖い。 だって、自分の全てを知られる気がするから。

無題

この詩に題名など無い
これはただの私の戯言

一つ言っていいかい

今日の君

正直怖かつたんだ

君に支配されるように感じたんだ

君は笑ってた

だけど心から笑ってたかは解らない

それは君にしか解らない

私はその笑いさえ怖かつたんだ

君が怖かつた

初めてそう思った

それだけ

それだけだ

君は笑ってたのにね

優しくしてくれたのにね

怖いって感じるのが おかしいのかな

私がおかしいのかな

最後に君と手をつないだとき

さっきまで怖かったのに

何故か安心した

無題（後書き）

やだなあ。

戯言だよ。

気にしなくて良いよ。

生死

「死ねよ」

死にたいよ

わかってるんだよ

死んでほしいんだろ？

俺だって死にたいんだよ

わかってるんだよ

でも

でもな

死ぬのが怖いんだ

そうだ

まだ生きたいっていう思いがあるんだ

結局のところ

死にたいのか

生きたいのか

わからないんだ

生きてても苦しい

死んだら楽になるのか

でも

死んだら全てを失う気がして怖いんだ

どうすれば良い？

俺は

俺はどうすれば良い？

答えはどこだ

どうすれば良いんだ

誰か教えてくれ

俺自身はもう なにもわからないから

生死（後書き）

もつ、考えるのも面倒くさいや。

希望人

すぐに人を信じる 僕

それがある人は

「素晴らしいことだ」と言い

ある人は

「疑うことを知れ」と言う

僕だつて

僕だつてさ

裏切られたことはあるんだよ

まあ 裏切られたつて感じたつてことは

信じ切つてなかったのかもしれないけれど

でも

信じたい

信じたいんだ

この人こそはつて

だから すぐ信じてしまうのは

僕がその人へ託す 希望なのかもしれない

人つてさ

良い人ばかりじゃないけれど

悪い人ばかりでもない

誰を信じていいかわからない

けれど

僕は多くの人を信じたい

希望人（後書き）

信じる。ただ、信じる。

「曖昧」

曖昧な人間関係を構築

気付けば

友達かどうか曖昧な人たちばかり

僕のことを本当に信頼している人はいるのか

僕が本当に信頼している人は誰だ

僕のことを本当に好きな人なんているのか

僕が本当に好きな人は誰だ

何もかもが 曖昧

曖昧に生きてきた

適当に生きてきた

だから

これは僕自身への戒め

僕が僕のことを知らない 解らない

「友達」

僕が勝手に友達と決めつけてるだけで

向こうはそう思っていないのかもしれないなんて

これは僕の 僕のための詩

「曖昧」(後書き)

考えていたことも、曖昧になってきた。

付き合う理由

人を好きになること

それは素晴らしい

時にいる

人を学歴で 見た目で 収入で

お付き合いするかしないか 決めつける人がいる

私はそんな人になりたくない

人を好きになることに 条件なんているものか！

高学歴で 格好良くて 高収入な人とお付き合いしたい理由なんて
自分をより良く見せるためなんじゃないのか？

私はそんなことを考えてお付き合いなんかしたくない
ただ

好きな人と一緒にいられるだけで良いじゃないか！

お互いが好きでもないのに付き合うというのは
不幸なことだと思うのだ

付き合う理由（後書き）

気持ちを優先したい。 条件だけで決めつけるなんて嫌だ！

冬の雨

今日は寒い

冬の雨が降っている

空は暗い

もうすぐ夜になる

早くお家に入りたい

温かいお家に

でも入れないの

閉め出されたから

僕は悪い子だから

お母さんの言うことを聞かなかったから

閉め出されたの

外は寒い

早く入れてよ

指が悴^{かじ}んで うまく動かないんだ

体が震えてきたよ

ごめんなさい ごめんなさい

ゆっくりドアが開いた

明るい光が漏れている

「もう入りなさい」

お母さんの声は まだ少し怒っていたけれど
少し心配そうな顔をしていた

「ごめんなさい」

僕はただ謝った

お母さんは 僕の震える体を抱きしめてくれた

冬の雨（後書き）

ごめんなさい。 ありがとう。

高校生の放課後

「さあ食いたいものを食べ！」

先輩は半分やけくそのように言った

ここはファストフード店

時間はもう17時30分

高校生4人で来店

たくさん注文した

ポテトを皆でつまみながら

くだらない話をする

今日の出来事から 愚痴まで

たくさん話した たくさん笑った

店を出れば もうすっかり辺りは暗くなって
少し寒いな 少し寂しいな

電車の中でも話して

すっかり疲れた帰り道

それでも楽しい

一緒にいられるだけで良い

お別れを繰り返して
最後の一人になった

電車で一人 揺られて
幸せ気分の帰り道

また こんな日があると良いな

高校生の放課後（後書き）

とても楽しかったんだ。忘れはしない。

冷めた想い

「僕のこと嫌いになつたの？」

そう聞きたいけれど

結局聞けずにいる

君からの電話もメールも減った

返事は前より素っ気ない

会わなくもなつた

君が忙しいのは分かるし

僕も暇じゃない

けれど君の事を考えてしまふんだ

これは僕だけですか？

だったら悲しいな

今日も携帯電話を握りしめ

そのまま眠りについてしまう

着信をただ待つて

朝が訪れる

人の心の変化が怖い

僕はそう思う

好きが嫌いになるということが 怖くてたまらないよ

嗚呼 着信はまだかな

冷めた想い（後書き）

知ってる。 僕の気持ちも冷めていってしまう事も。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9762v/>

僕が綴った詩

2011年11月20日02時13分発行